

麻美はホテルの自動扉をでたところで空を仰いだ。那覇の空は快晴だった。

昨日の夜、航空会社から今日の那覇発関西空港行きの便が欠航するとメールが届いた。台風の進路は沖繩を通らず近畿・東海をかすめて、東京近辺に上陸するコースを取っていた。空の便の欠航も関東の方が先に決まっていたため、関西方面は大丈夫なのだと言っていた。メールから飛べる航空会社のサイトで代替便を探し始めたが、あつという間に翌日の便は満席になってしまった。

結局、その時は翌々日の遅い便を代替便に振り替えたのだが仕事のことを思うとどうしても諦めがつかず、今日中に帰る方法を探し回った。チケットを取った航空会社とは違う会社のサイトに行き、夕方発の福岡便を見つけてチケットを取った。その便の到着時間から乗り継ぎ可能な新幹線もネットで取ることができたときには夜中の零時を過ぎていた。老眼がきつくなり小さい画面で手続きをするのにかなり消耗したが、神経が高ぶってほとんど眠れていない。

キャリアケースの持ち手を掴んだ。傾けると腕に重みが伝わる。数歩歩いて車道を渡った。アスファルトの地面にコマの擦れる音が鳴る。本来なら、夜八時の便なのでチェックアウトしてから、おもしろまち駅にある免税店で自分用の買い物をするつもりだった。今はそれより、チケットがちゃんと取れているのか不安でそれどころでない。代替便に変更したチケットのキャンセルができるのかも分からない。麻美の頭には空港に向かうことしか浮かばなかった。

那覇空港は気抜けするほど閑散としていた。福岡便を予約した航空会社のチェックインカウンターを探す。航空会社のロゴを見つけ、設置されている機械に予約番号を打ち込んだ。すぐにチケットは発券された。次はキャンセルする航空会社のカウンターに行き、払い戻しができるかだ。その会社のカウンターは反対側の端にあった。カウンターの中に制服をきた女性が三、四人いたがそこに並んでいる人は誰もいなかった。スマートフォンを持ち、画面にチケットの予約番号が載っているところを開いてみせた。代替便に変更してしまつたが、他で今日の便が取れたのでキャンセルしたいと言った。対応してくれた女性は、パソコンをカチカチと操作して、納得したように、麻美の方に向き直った。

「はい、そうしましたら、予約はキャンセルしました。払い戻しですが、こちらのQRコードから入ってもらってお客様の方で手続きをなさってください」

そう言うとA4の紙を差し出した。麻美はその紙を受け取って、書かれていることを読んでみた。自分で処理しなければならぬなら、しっかり理解しておく必要がある。こういう作業は必ずと言っていいほど説明書通りにいかず、時間と労力を使ってしまうからだ。

近くのベンチに座り、説明書き通りやってみた。あるところまでくると、画面が進まない。また航空会社のカウンターに戻り、やってみたができないと報告した。さっきとは別の職員が対応した。しばらくして、いったん変更をした場合はここからは払い戻しができないと言われた。麻美のようなケースは別のQRコードから入り、チャットで対応すると、さっき渡されたA4の紙の裏面を指して言った。

——やっぱりこうなるのだ。

麻美は職員から返却されたA4の紙を受け取りつつ、

「いつまでに手続きしなければならぬとか、ありますか？」と訊いた。職員は穏やかな表情でかぶりを振った。

やっかいな事案が残ったことで気持ちはさらに重くなった。

さっき座ったベンチに戻った。搭乗時間まで四時間以上ある。会社への土産はここで買えば済むし、キャリーケースには部長に頼まれた波照間島の「泡波」という泡盛がバスタオルに包んで入っている。何でも限定販売で島の食糧品を売っている売店で買ったのはラッキーだったらしい。あとは保安検査場に行き搭乗するまで何もすることはないが、このまま動きたくなかった。

シヨルダーバッグを膝の上に置くと、表面の凸凹が手に伝わってくる。ファスナーを開けてバッグの中にあるカメラを取り出した。一眼レフだが女の小さい手にもすっぽりと収まる。写真の趣味はないけれど旅に出る時はいつも持っている。

「こんにちは、前に座ってもいいでしょうか？」

俯いてカメラを触っていると声をかけられた。

「あ、はい」

そんなこといちいち断らなくなつていいだろうと、麻美は顔を上げて相手をみた。

同じくらいの年恰好の女性で向こうもひとり旅のように見えた。シヨートボブに緩いパーマをかけており、フレームの大きなサングラスをかけている。レンズには薄いピンクの色が入っている。

「飛行機、大変じゃなかったですか？」

彼女は麻美の真向かいに座るとそう尋ねた。

「そうですね。わたしは閑空でしたが、欠航になったので福岡便を取りました」

おしゃべり好きがきた……。ベンチ近くにあるフライト情報の電光掲示板を見上げながら言った。

「あら、わたしも福岡に変更したんですよ。茨城空港だったんですが」

彼女は白いパーカーに白いパンツを履いていて、笑った口元も白く、歯並びもきれいだ。「じゃ、今日は福岡でお泊りになるんですか？」

しばらく話を合わせてやろう。麻美は生成りのブラウスの襟元を合わせながら訊いた。「そうなの。息子たちは明後日の便に変更して、沖繩に残るって言うからね。わたしはそれならばって、福岡にね。福岡からだと明日中に帰れるみたいだから」

彼女はショルダーバッグを開いて何やら探した。

「これ差し上げます」

手にしているのは、木製のミニチュアサイズの絵馬のキーホルダーだった。

受け取って、しげしげ眺めていると、

「絵馬の印刷してるのよ。そういう小さいのじゃなくて、願い事を書いて吊るす方の。そこはまだ商品になってないサンプル。かわいいでしょ？」

物、あげたがり屋か……。麻美は大きく頷いた。それに一方的に話をする人だと思った。麻美が話したそうと、息を吸ったと同時に、彼女がお昼食べましたか？ また、首を振った。じゃあ、一緒にどうですかと、もう立ち上がっている。

レストランフロアに行き、営業時間になったばかりの沖繩料理屋に入る。麻美たちが座るとすぐに十代に見えるアジア系のウエートレスがオーダーを取りにきて、たどたどしい日本語で注文を繰り返していった。

「じゃあ、改めて自己紹介！ わたしは大庭早苗といいます。仕事はさっきも言った絵馬に干支の絵を印刷する会社をやっています。会社って言っても、わたしと息子、ときどき娘が手伝うくらいの規模よ」

パスケースから名刺を一枚抜きとり、麻美の目の前に差し出した。

「息子さんと沖繩に？」

麻美もバッグから名刺ケースを取り出して、早苗に差し出した。

「息子家族と五人でね。わたしの誕生日のプレゼントに。この会社、聞いたことありませんよ。すごいなあ、課長さんじゃないですか」早苗は名刺に目を落としながら言った。

麻美はしまったと思った。

「あ、それ違うんです。あの、その名刺は前のって言うか」しどろもどろに続けた。

「今は違うんです。会社は同じなんです。部署が変わるんです。わたし今月五十五歳で役職定年したので、明日、会社に出社すれば平社員です」

旅支度するとき無意識に入れてしまった名刺ケースを見つけたときは、習性というかサラリーマンが骨身に沁みついているなど我ながら呆れたのだ。いまは自分の口から発せられた、明日から会社・平社員という言葉の響きに軽く打ちのめされた。

「役職定年？」早苗が首を傾げているので、

「定年は六十歳なんです。一定の年齢になると管理職から外されるんです。それで会社に残る場合は平の社員になり、お給料もダウンするという」

「何ですか？ 定年もしていない人のお給料を下げるの？」

早苗はテーブルに体半分がのるくらい身を乗り出して、聞き返した。

「今の会社は役職定年をとっているところが多いですよ。傲慢に聞こえたらあれですけど、社員をたくさん抱えた大きな会社はほぼそうですね」

早苗が大きく首を振っているのを見ながら、麻美より前に役職定年で平になった社員のことを自分がどうみていたのだろうかと思った。

役職定年を迎える麻美のところに一年ほど前から「うちに来てほしい」という他社からのオファーがいくつもあった。部長からも社内でもそれなりの席を考えておくと言われていた。麻美自身も五十五歳ならまだ一線で仕事ができると思っていた。

麻美は平社員にはなりたくないし、そうはならないと思っていたのだ。

それが蓋を開けてみたら、同期の男性社員たちは次々「それなり」の配属先が決まっていくなか、麻美だけ決まらなかった。ヘッドハンティングを打診してきた会社ですら、面接の後に断られた。理由がまた理不尽で、歳が行き過ぎているからだというのだ。そもそも何歳だと思っただけで声をかけてきたのかと担当者に訊いたが、「申し訳ありません」の一点張りである気はないのが分かった。「それなり」の配属先に行けなかった先輩たちの役職定年後の扱いを見ていて、ああはなるまいと思っていた立場に自分もなるのだ。部下が上司となり、周りから扱いつらいと疎まれる。まだやれるという自信など跡形もなく消滅した。一カ月前によく役職定年後の配属が決まった。販促企画部だった。販売活動をしている部署をサポートするのが仕事だが、内容は一連の必要書類をすべて準備するのが仕事になる。麻美のスキルでは足手まといになるのではないかと憂鬱で仕方がない。部の送別会の翌日から沖縄・八重山へひとり旅にでたのは、一夜にして席が変わり、呼称も変わる現実から少しの間でも逃げるためだった。

さっきのアジア系の店員と日本人の年配の女性店員が料理を運んできた。年配の店員が沖縄訛りの口調で料理の名前を言いながらテーブルに料理を下ろしていく。続いてアジア系の店員が黙って料理を置いた。

「ベトナム人？」

早苗は彼女が離れると麻美に訊いてきた。

「わたしもなんとなくベトナムかなと」

幼さの残る容姿だが、しばらく見入ってしまうような綺麗な顔立ちだった。

「茨城のうちのあたりもベトナム人実習生というのかね、大勢働いているの。大阪は？」

ソーキソバとジューシーを手前に引き寄せながら言った。

「大阪ではあまり見なかったと思いますね。わたしが知らないだけかもしれませんが」

麻美はソーメンチャンプルとスパムおにぎりを引き寄せた。

「わたしね、亡くなった主人とベトナムに旅したことがあってね、さっきの子みたいなほっ

そりした綺麗な女の子が真っ白なアオザイを着て通りを歩いていた。絵画から抜け出たようだったの。高校生の制服なのかしらね。ベトナムは食べ物も美味しいし、すぐく気に入ったの。主人にまた連れて行って言ってただけどね」

懐かしそうに言って、ソバをひと啜りした。

「仲がよかったですね」

「ご結婚は？」早苗の問いかけに、麻美はかぶりを振った。

「うちは仲がいいというか……。三歳時分からの幼馴染みで、同じ高校出て、それぞれ仕事に就いて、何年かしたら結婚してって、そんな感じだから。主人は板金加工の職人をしてたのが、結婚してわたしの実家の印刷所を継ぐことになってね。絵馬の印刷は主人がエンボスの加工をすることうちでしかできない印刷に仕立て上げたってわけ」

でもなぜ？ 早苗は夫という頼れる存在を失い、今もその思い出に浸っているように見えるのに、寂しげでもなく暗くもない。

「主人が病気で亡くなって、直前に機械の入替えをしたばっかりだったから、借金だけが残ったの。一時は債権者に印刷所も差し押さえられたんだけどね……」

早苗はそう言って、またソバを啜った。

「あの人たちにはできなかったの。うちの印刷は主人の作った鋳型があつてこそできるんだけど、それと版の組み合わせて印刷するから一般的じゃないのよ。マニュアルもないから主人とわたししかできないの。半年も経たないうちに、わたしにやってくれて泣きついてきた。最初から少し待ってくれたら、わたしがやりますからって、そしたら借金も返せるからって言ったのを無視して、取り上げたたくせして。ふふふふ」

その時の交渉は早苗に有利なものとなり、返済額や返済の期間に注文をつけて、その通りになったのだと右手の指で輪っかを作ってみせ、嬉しそうにまた、ソバを啜った。

「じゃ、いまは、経営者としてお仕事されてるんですね？」

一時的にせよ夫婦でやってきた印刷所を手放さなくてはならなかったとき、どんなに苦しかったのだろうかと思った。そしてその間はどうかやってしのいできたのだろう。麻美は自分の境遇よりも更に厳しい立場に早苗がいたころの話が聞きたいと思った。

「経営は息子よ。もとは別の仕事をしたのが、それをしながら経理や配送をしてくれる。製造をわたしがひとりやってるわけ。」

そうそう、時間があつたんで、那覇の海の傍に建つ神社に行ったのよ。そして、うちで作った絵馬がかかってびっくり。うちが出荷するのは卸問屋だからこの神社に使われているのか知らなかったの」

「それすごいじゃないですか。なんていうか、引き合わされた感じがする」

こうして早苗と話をしていると、麻美の落ち込んだ気持ちは軽く浮き上がってくるようだった。

「それでも借金は返されたんですか？」

調子づいて訊いてしまった。

「まだまだ。でも、取れるものはみんな取っていかれたから。守るものはこの身ひとつよ。無一物だ」

あはははと大声で笑ったので、ほぼ満席の店の中の人の視線が注がれることになった。

早苗とは同じ便だった。一緒に保安検査場も通り、搭乗ゲートのベンチで待った。

搭乗開始のアナウンスが入り、後方の席から案内が始まり早苗が先に乗り込んで行った。機内にはいると、小さな子どもを連れた家族づれが目立った。麻美が席に座ってもまだまだ乗り込む人が続いた。ようやく人の流れが止みそろそろ動きだすかと外を見ていると、C Aが声をかけてきた。

「お連れ様の隣が空席ですのでお席を移られますか？」と言う。

すぐに分らず、C Aの顔をぼかんと見ていると、振り返るように促された。麻美からも見える場所に早苗がいた。

「はい、そうします」と言って、頭上の荷物が入っているラックに視線をやった。

「お荷物はそのまま」C Aは察しよくラックのエッジに手を当てた。

よろよろと通路を歩いて早苗のいる席にきた。

「迷惑じゃなかった？」早苗は一旦立ち上がって通路に出て、麻美に窓側の席を与えた。

「とんでもない」と言って腰をおろした。

「あれ、ここわたしたちだけ？」

三列の両端に早苗と麻美が座る形になって気が付いた。

「そう空席。わたし、こういう時の引きがいいのよ」早苗は両手を広げ足をピンと伸ばした。麻美も真似をして手足を伸ばした。

飛行機は滑走路にでると、スピードを上げながら疾走を始めた。背もたれに吸いつけられるように力が加わる。地面を擦るタイヤの音が消え、窓には斜めになった空港建物が嵌っている。一回、二回と翼が左右に傾き旋回をする。地上の建物や道路が小さくなっていく。麻美はぐくりと唾液を飲み込んだ。

機体が水平になり、シートベルト着用ランプが消える。C Aたちが飲み物のワゴンを押し配り始めた。

「さつきロビーで役職定年の話聞いて思ったんだけどね、わたしは自営で仕事しているから、何があっても自分たちで責任を負わなくちゃならないけど、裁量を持つことができるじゃない。要は自由度が高い。けど、麻美さんたちサラリーマンには自由に決めていることってなくない？ その代わり、福利厚生や年金で手当てされていたはず。定年がゴールだと頑張っていればよかったのよね」

早苗がこんなことを言い始めたのは、麻美がロビーで、役職定年はサラリーマンの自尊心を無視したシステムだと言ったからだと思った。時間切れで話は中断されたままだったが、

本音を言えば、誰にも言えなかった恨み言を聞いてほしかったので、それは吐き出せたと思う。

「さっきはごめんなさい。つい早苗さんの仕事と自分を比べて、会社に依存するしかないことが情けなくなっちゃって。頭ではどうしようもないことだと分かっているのにな」

麻美は急に恥ずかしくなった。

「世の中なるようにして、なってる」

早苗が笑って言う。

「え？」

「どうしようもない、を肯定的で諦念を抜いた言い方にすると、世の中がなるように、なつてて、そこにいる人間がどう好き勝手に生きてようと影響ないって思わない？」

麻美がいまいち解せない顔をしていると、

「がんばれ」と言っ肩をさすってくれた。

配られた飲み物の紙コップが回収されると早苗は目を閉じて眠っているようだった。

飛行機は白い雲の中を飛んでいる。それが刻一刻とオレンジのグラデーションを帯びていくさまは、この世ではない美しさだ。麻美はスマートフォンを取りだして、カメラのボタンを押した。

雲はオレンジから深紅に濃度を増していく。白い部分はほぼなくなり夜の帳が下りようとしている。早苗という人には文句なく明るい部分と人には見せない夜のよう部分があるのではないかと思った。早苗がいまだに借金を抱えているときいてもなお、幸せそうに思える。子や孫がいるからという単純な理由ではない。そして早苗のもっている資質のようなものが麻美を惹きつけるのだ。ひとことといえば、早苗のそばにいたりリラックスできることだろう。早苗が声を出して笑うと、麻美も本当に可笑しくなって笑ってしまう。早苗のように生きられれば、会社と自分を切り離して、会社に仕えるという気持ちを忘れて、自分の生活のために働けるのだろう。

麻美も目を閉じて眠ろうとした。すぐに周りの雑音が気にならなくなってきた。大きく息を吸った。息をするとみぞおちの辺りが軽く圧迫されるような不快感がある。痛いわけでも苦しいわけでもないのだがこの症状がでると不安感が増幅されるのが常だった。心臓に問題があるのかもとネットで検索したことがあるが、そもそも感じているみぞおちの圧迫感というの言葉としては正しい訳ではない。ぴったりくる表現を探してはみるが、焦燥感という言葉が近い気がする。会社のことを話しているとき、同僚たちから慇懃な労いの言葉をかけられたあとの蔑むような視線を思うと焦燥感が始まる。これからも彼らの前に我が身を晒しながら生きるにはどんな気持ちで臨めばいいのかわからない。仕事を頑張っって、周囲に認められることが正しいことだと思ってやってきたのだ。ざわざわと異物がぶつかりあうような焦燥感。しかし、焦燥感とは身体の状態を表す語彙ではないはずだが。旅の間、幾

度となくこの症状が麻美を困らせた。

近くにいた小さい子どもが泣き出した。見ると父親の膝の上に座る一歳くらいの男の子だった。父親は隣に座る母親にラムネ、ラムネと催促した。母親がラムネ袋を取り出すと、一粒取って男の子の口に入れてやっていた。麻美はそれをみて、なるほど、食べ物を食べさせると耳抜きになるのだと知った。いや、こんなことは子どもを持つ親ならみんな知っているのか。麻美も子どもがいたら変わっていたらだろうか。

部長は麻美に一度約束していた好条件の部署をいつの間にか同期の男に回していた。社内ですれ違ったとき、麻美は相当恨めし気に部長を見たのだろう。部長が手招きで廊下の隅に呼んで、その話をした。同期の男にはまだ中学生の子どもがいる。家庭がある。そういう、麻美が抗えない理由を並べて立ち去った。

麻美は笑わない女だと言われている。意識的に会社では、仕事以外の話はしてこなかった。昼ご飯は売店でサンドイッチとコーヒーを買い、ひとり休憩室で本を読みながら食べていた。そうすれば、誰にもプライベートなことに触れられずに済むからだだった。プライベートを見せたくない気持ちの裏には会社が不適格の烙印を押すであろう「個性」を本能的に封印したのだと思う。

CAのアナウンスが麻美を機内に連れ戻した。予定より三〇分も早く着くらしい。早苗が隣で大きな伸びをしている。

「もう暗いわね」と外を見て言った。窓の外はインクブルーに様変わりしていた。

出張で何度か福岡空港を使ったが、地下鉄で福岡の中心・博多駅まで二駅で着くのは便利この上ない。今日は、地下鉄からJRに通じる通路にはやたらと緑色のシャツを着た外国人がいる。きつと日本で開催中のラグビーの試合があったのだと思った。どこの国から来たのかわからないが皆酒に酔っているようだ。

JR博多駅のコンコースに来ると、サラリーマンやOLが足早に緑の集団の間を通り過ぎて行く。麻美はコンコースの真ん中でみどりの窓口の場所を探すため立ち止まった。ゆっくりと回転すると緑色のパネルが見つかった。中に入ると窓口には二十人ほどの行列ができていた。窓口の上の電光表示板には九州新幹線と山陽新幹線の両方が表示されている。麻美が予約した新幹線は「さくら」で行先は「岡山」だ。列には並ばず自動発券機でチケットを受け取った。

新幹線の表示のある改札機のところでは早苗と別れた。SNSの連絡先も交換した。改札を通ると、通路は人の姿もまばらで静かだった。音がしないせいか、さっきの人の多さが嘘のようだ。

一〇メートルも先にあるラーメン店からと思しき豚骨出汁の強烈な獣臭がする。福岡に住む友人が、ラーメン屋の前を通って豚骨のくさい臭いがしない店は偽物だと言っていた。麻美が取った新幹線の発車時刻まで二〇分ある。一度通りすぎたが、引き返して店に入った。店内に客はおらず、厨房の中に黒いタオルを頭に巻き、黒いTシャツをきた店員が俯い

て何かを切っていた。「はい、いらっしやい」と目線だけあげて麻美をみた。カウンターに座ると水がさっと出てきた。店員の後ろには大きな寸胴鍋があり、白い湯気を上げている。「豚骨ラーメン」とメニューの先頭にあるラーメンを注文した。五分たっても出てこないので少し焦りだしたところ、カウンターにラーメン丼が置かれた。茶色がかった乳白のスープは少し泡立っている。その上に刻みネギと細切りのきくらげ、一個まるまるのゆで卵、薄いチャーシューが二枚載っている。スープを飲むと濃厚な脂が口に広がるが、豚骨独特の臭みはない。箸を入れると細い平打ち麺がスープをからめて塩味もちょうどいい感じだ。麺をすすりながら、なんでラーメンを食べたくなっただろうと思った。

「あっ」思わず声がでた。

厨房の店員は顔を上げて麻美をみている。

早苗が福岡に着いたら博多ラーメンを食べるとしきりに言っていたせいだ。麻美は残りの麺を全部啜りあげ、「お会計を」と言った。

発車三分前にホームにあがる。麻美の乗る「さくら」はすぐに入線してきた。通路側に座り車内を見回してみる。立ち動く人はいるが、空席はなさそうだった。新幹線の車内放送では、台風十九号の影響により岡山までの運転となりますと何度も繰り返している。台風一九号によって、行先を変更せざるを得なかった人は相当いるに違いないと思った。

新幹線がゆっくり動き始めた。車窓からビル群の明かりが見える。福岡に着いてから初めてみる外の景色だった。ここも沖縄と同じく台風とは無関係の地だった。

前の席から、「新大阪に着くの、十二時になるみたいですね」と声が聞こえた。座席の間から見えるスーツの男が隣のスーツの男に話しかけている。「六時間かよ」話しかけられた男が言った。麻美も自分のスマートフォンを押し時間をみた。倍の時間がかかるのかと座席レバーを引いて背もたれに深く沈みこんだ。大きな音漏れだなど、通路を隔てた隣の席をみたら二十代前半の男が自分のスマートフォンにニュース番組を映しているのだがイヤフォンをつけずに観ているのだった。ありえないと思ったが、台風情報で各地の様子をリレーで放送しているところで、関東の方は風よりも雨の被害が出ているらしいことが分かった。

波照間島の夜だったか。台風は八丈島の遙か南にあるという天気予報を石垣島から乗った離島フェリーのテレビで観た。海は凧いできて文句なしの快晴だった。島で原付バイクをレンタルし、島を一回りした。岸壁からかなり陸に入ったところに白い灯台があった。その前に丸太の杭が一本打ち込まれて、白いヤギが繋がれていた。バイクから降りて近づくとヤギは右や左に暴れた。ヤギは民宿の庭にも繋がれていた。

さらに走っていると、枯れた平地が広がり一本の道路が真っすぐ通っている場所にてた。道路に沿って電柱が延々と立ち並んでいる光景を観て、映画に出てきそうな場所だと思った。鞆からカメラを取り出して、道路の真ん中に立ちシャッターを切った。その場にしゃが

んで再度シャツターをきる。電柱がレンズの対角線に入るように斜めから撮る。麻美は憑りつかれたように荒寥とした景色を何枚も撮った。真っ青な空と深い緑の島周辺とは景色をまったく異にしている。そうしているうちに、心臓の当たりにざわざわとする焦燥感が始まった。

宿の食堂で夕食を食べ、そのあとに「ゆんたく」に誘われて深夜まで食堂で泡盛と三線と島の唄でもてなされても、麻美の体の中のざわつきが収まることはなかった。

「ゆんたく」がお開きになると、麻美は部屋に戻らず外に出た。一〇メートルも歩くと、宿の明かりも届かない暗闇になった。すぐ近くから、蒸気が噴き出す音が聞こえてくる。暗闇に目が慣れてくるとつすら煙突がみえてきた。そこから煙が上がり、数分間隔でプッシュューと圧の抜ける音がする。煙突のある敷地を越えると、朝、離島フェリーが着いた船着き場にてた。波止のシルエットが薄墨の濃淡のように海との境を分けている。

波の音と暗闇の中にどれくらいいたのだろうか。居場所の無くなった元の場所にもどりにたくない、何もかも放り出したいと思う気持ちをやっと抑え込むことができたみたいなので宿の方に歩きだした。煙突の敷地の辺りを歩いていると、草むらから何か飛び出してきた。暗闇に目が慣れていたので、それが小さな鳥であることはわかった。ずんぐりと丸いフォルムの鳥だった。近づいてよく見ようとしたり、出てきた草むらに再び飛び込んでしまった。

宿の宿泊棟は食堂とは別棟だ。自分の家のように玄関の鍵を開けて中に入ろうとした。そのとき、白とグレーの縞の猫が部屋に滑り込んできた。部屋の奥に行ってしまったので、どうでもよくなり戸を閉めた。麻美が歯を磨いてパジャマに着替えていると、猫がどこから出てきてベッドに飛び乗り、同じところを回っていたかと思うと丸くなってしまった。ベッドの半分を猫に譲り、麻美も寝た。

新幹線が福山の手前で停まった。架線に物が引っ掛かっているため三〇分程停車しますというアナウンスが入った。その声で目が覚めた。寝ているとは思ってなかったのだが。

岡山駅に着くとキャリーケースを持った乗客はほぼ全員が在来線のホームに向かった。停車中の車両は黄色の塗装で大阪では見かけない年代物だった。対面式の座席は埋まっており、通路やドアの辺りまで人が立って満員状態だ。地元の人も多く乗っているようで、麻美たちのような新幹線の乗客が乗り込んできたことを驚いたように見る人もいた。

ここから新大阪まで各駅に停まりながら帰ることになる。こんな経験はこれから先、「青春十八切符」でもすることはないだろうと思った。朝の十一時に沖繩にいた自分が、夕方の五時過ぎに博多、夜の七時に岡山のローカル電車で揺られている。

大学生の頃、十八切符が売り出されると毎回ひと綴り買って旅行の計画を立てた。もっぱら、旅と電車が好きな友だちが時刻表をみて、ルートを決めてくれる。麻美はただついて行けばよかったのだ。時間はたっぷりあり、不安なんて微塵もなかった。友だちに会いたいと

思った。

麻美は対面座席の角の持ち手を握って立っていた。その手の上に雫が落ちた。十八切符の友だちのことを思い出したら鼻の奥が急に痛みだして涙が止まらない。明るい車内で泣くなんてどうしようと慌てた。麻美は顔を伏せた。脳裏には病室にいる友だちのやせ細った顔とパジャマから出た細い腕があった。麻美が離婚によって憔悴しきっていたとき、麻美をランチや映画に誘い出してくれた友だちだ。

友だちは見舞いに来た麻美にカメラを差し出した。十八切符の旅の時、彼女がいつも持ってきたコニカのハーフカメラだ。それを形見にやると言う。

麻美たちは三十五歳になっていた。友だちは麻美が離婚した二年後に結婚して、子どもが二人いた。五歳の女の子と三歳の男の子。彼女が乳癌に気づいたときにはどうしようもなかったらしい。ベッドの横で泣く麻美に泣きたいのはこっちだよと笑う友だちの顔が……。

静かな電車の中で麻美の息遣いが響く。学生服の男の子が黙って麻美に席を譲った。顔をあげられず、お辞儀だけして席に座った。ショルダーバッグからハンカチを取り出そうと中に手を入れる。堅い感触がカメラだとわかる。旅にでるときには何も意識せずに鞆に入ってきたが、手に触れているカメラから友だちの思い出が溢れてくる。

『ハーフカメラっていうのはね、フィルムを半分ずつ撮影するから倍のコマが撮れるの』友だちがいつも得だ、得だと自慢していたが、麻美には意味が分からなかった。いまこのカメラには何年前に入れたかわからないフィルムが入っている。この旅でもフィルムはまだ撮り終わらなかった。

『決定的瞬間を見逃さないためにはいつも鷹のような目であたりをみておくんだよ』

けれど友だちが撮るのは、麻美の寝顔の盗撮写真や猫ばかりだった。それを指摘すると、『自分の好きなものを撮ればいいのよ。人に認められたとしても、好きでないもので認められて嬉しい？』

逆に質問された。

麻美はたったひとりの友だちを失った。

以来、離婚したとき以上に仕事に没頭していった。マンションのローンが常にプレッシャーだったこともある。仕事で認められてさえいれば、仕事は裏切らない。人に頼っていても大事な人たちは自分のもとを去っていくのだから。耐え難い苦痛。それならば、最初からいなければいい。誰とも心を開いては付き合わず、ひとりで生きていく、自分で自分をなんとかする、閉じた世界でいいと思った。

ここに友だちがいたら、

『ひとりで生きていくって、何言ってるの?』と即座に吹っ掛けてくるだろう。理屈っぽい友だちだったから……。

麻美は友だちの亡くなった翌年から、命日ではなく彼女の誕生日に鉢植えの花を送っていた。友だちの夫とは結婚式と葬式の二度しか会ったことはなかったが、毎年送りつづけて

いる。いつの頃からか、友だちの夫が庭に移植した花々を写真にして年賀状をくれるようになった。一番最初、十九年前に贈ったのは白いクレマチスだ。友だちが庭付きの家を買ったとき、絶対にクレマチスを植えると言っていたからだ。次の年から違う花をと思っていたが、クレマチスは四季咲き、一季咲き、花の色もたくさんあって、それならばクレマチスが好きだった友だちが驚くくらいの種類を揃えてみようと思った。友だちの子どもたちも二十五歳と二十三歳になっている。年賀状の宛名を書くのも友だちの夫から娘へと変わった。差出人が娘になってからは、添え書きも付くようになった。我が家のクレマチスは町内でも有名で、いつも人が足を止めて観ていきますと書いていたときには、頭の中に色も形も大きさも様々なクレマチスが咲いた庭が浮かびあがったのだった。

相生駅に電車が止まった。それまで動きのなかった車内がここでは半数以上の乗客が降りていった。麻美に席を譲ってくれた学生もすでに車内にはいなかった。次の乗り換えの姫路まであと数駅というところだろう。着くころには十時近くになっているはずだ。

——やっと空いたか……。岡山、相生は一時間に一本しか走ってなくて、普段からまあまあ混んでるらしいけど、今日は激混みだったなあ……。

麻美の後ろの方でそんな声が聞こえた。いつのまにか涙は乾いていた。

姫路で乗り換えた電車は馴染みのあるシルバーの車両だった。慌てずとも長椅子シートの上の端っこに座ることができた。岡山からずっと山あいかトンネルの中を走っていたが、何駅か過ぎると電車は海沿いを走っている。台風のせいで間引き運転をしており、各駅停車しか走っていないはずだが、車内は混雑していなかった。駅と駅の間も町の明かりや自動車のライトが続いている。後から乗ってきた人たちは、キャリーケースを持った乗客たちが博多から乗り継ぎを経て、ここにいるなど知る由もないだろうと思った。

麻美の頭の中は空回りするリールのように不要な回転を続けている。昨日はあれほど必死に帰ることを欲していたのに、今はどうでもよかった。

膝に置いたショルダーバッグの中で、スマートフォンが鳴った。見ると、早苗からのメッセージだった。まず目に飛び込んできたのは、直径一メートルはあるうかと思われる、大鍋に串に刺さった具がぎっしりと入ったおでんの写真だった。福岡や博多のビジネスホテルがどこも満室だったので、小倉に移動したのだそうだ。早苗が送ってきたのはおでん屋の屋台だった。こんな美味しいおでんは食べたことがないが、屋台でアルコールは売っていないのが残念だと書いている。明日は早起きして太宰府天満宮に行ってから帰ると結んでいた。好きなように生きているなあと思った。

麻美は「羨ましい」と打ち込んで早苗に返信した。すぐさま、早苗から返信がきた。

『帰ったら栗を送ってあげる』と書いてあった。

麻美はスマートフォン画面を指でゆっくり撫でた。だから言ったでしょと友だちが耳元で囁いた。そうだね。ほんとはひとり嫌だったんだよと応えた。

そう言えば、空港で貰った絵馬のキーホルダーのお返しもしてない。日本酒が好きだと言ったから、池田の「呉春」を栗のお返しに送ろう。それから、会社に行って、お土産を渡す自分を想像する。車窓に麻美の笑い顔が映る。